

# 関係節形成のタイプによる接近可能性の階層再考と オーストロネシア諸語における関係節形成の発達過程

山本 秀樹

## 1. はじめに

1960年代半ば、特に Greenberg (1963) 以降、言語の類型化が有意義な普遍性の発見につながり得るという発想のもと、言語普遍性の研究と密接に結びついた形で新たに復活した近代の言語類型論は、広範な世界諸言語のデータに基づいて、種々の言語現象に関して、世界諸言語間に見られる普遍性と変異のあり方を発見、記述し、それらに対する説明も提供してきた。なかでも、関係節形成における「接近可能性の階層 (accessibility hierarchy)」は、諸言語間にわたる関係節形成の類型化を通じて、従来の個別言語単位の研究では気づかれていなかった、世界諸言語の関係節形成のあり方について、興味深い普遍性をとらえたものである<sup>1</sup>。この普遍性は、言語類型論以外の言語研究者たちの間にも広く知られるようになった普遍性の1つであるが、一般には、階層の上位のものほど通言語的に関係節化がなされやすいという、単純な形の結論のみがいわば一人歩きして、広く知られるようになった。しかし、この普遍性は、むしろ関係節形成のタイプと関連づけられることによって、人類言語一般における、より有意義な普遍性が見出されるばかりか、本稿で考察するように、関係節形成の通時的な発達過程に関する重要な知見を得ることも期待できるものである。また、類型論における関係節形成のタイプ分けとしては、Comrie (1989) に

よる4つのタイプ分けがよく知られているが、このタイプ分けについて問題点も残されている。

そこで、本稿では、関係節形成における接近可能性の階層を、関係節形成のタイプと関連づけられた形で再考して、Comrie (1989) による4つのタイプ分けの問題点を検討し、さらに、特にオーストロネシア語族における関係節形成の通時的な発達過程に関する仮説を提示することにする。

## 2. 関係節形成における接近可能性の階層

関係節形成に関して、その主要部が関わる文法的関係ないし役割には2つある。たとえば、The man [that I saw at the party] was his father において、関係節の主要部の働きを担う the man は、角括弧の関係節内部では saw の直接目的語であり、主節においては was his father の主語である<sup>2</sup>。これらのうち、後者の、主節内部における主要部の文法関係には、今日まで類型論的にあまり興味のある普遍性は発見されていない。それに対し、関係節内部での主要部の文法関係については、接近可能性の階層として知られる、類型論的に興味深い普遍性ないし普遍的傾向が存在することが知られている。なお、類型論の慣習に従って、以下、たとえば上の関係節の例について言えば、「直接目的語の（に対する）関係節化」のような言い方をする。

この階層は、地域的、系統的、類型的な偏りを避けた約50言語のサンプルを基に、Keenan & Comrie (1977) が、当初、下記のような形で発表した<sup>3</sup>。

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格 > 属格 > 比較対象語

しかし、おそらく、間接目的語という概念ないし範疇自体の通言語的な有効性に疑問がある点や、比較対象語を含めた形での階層関係の普遍性が必ずしも明確でないといった問題点からと思われるが、Comrie (1989) は、これを、下記のような簡潔な階層に改訂しており、本稿では、この改訂された形に用いて接近可能性の階層を論じることにする。

主語 > 直接目的語 > 非直接目的語 > 所有者

この階層が基本的に意味するところは、諸言語にわたって関係節内における主要部の文法関係に着目すると、この階層の上位のものほど関係節化の対象になりやすく、下位のものほどその対象になりにくいということである。たとえば、マラガシ語やマオリ語では主語に対する関係節化のみ可能、ルワンダ語やガンダ語では主語と直接目的語に対してのみ関係節化が可能である。また、北フリジア語のフェール方言では、主語から非直接目的語までの関係節化は可能だが、所有者の関係節化はできない。また、スロヴェニア語やウルホボ語のように、所有者も含めてこれらすべての位置に対して関係節化の可能な言語も存在する。

この普遍性は、上に概略を述べた程度の形としては、言語類型論以外の研究者たちの間にも広く知られるようになり、しばしば英語なども階層上のすべての位置が関係節化可能な言語の例と受け取られているようである。しかし、上で見たような、この階層の上位から見てある位置までは関係節化可能で、それより下位の位置は関係節化不可能といった形での類型論的一般化が有効な言語は、おそらく世界諸言語のうち一握りにすぎないと思われる。つまり、上に例としてあげたような言語は、実は、その言語内に関係節形成のタイプが1つしか存在しないという、むしろ人類言語の中では比較的まれと思われる言語である。したがって、後に論じるが、英

語なども、むしろ複数のタイプの関係節形成法を利用してすべての位置の関係節化を可能にしている言語の1つとみなすべきであって、上記のスロヴェニア語等と同様の例として英語をあげるのは適当でない。実際、世界の多くの言語は、後に見るように、複数のタイプの関係節形成法を有し、接近可能性の階層は、そうした関係節形成のタイプと関連づけられてこそ、広範な世界諸言語にわたる通言語的な意義を持ち得るものである。

### 3. 関係節形成のタイプ

上述したように、接近可能性の階層は、関係節形成のタイプを考慮することによって重要な一般化をとらえることができる。Comrie (1989) は、関係節のタイプを以下のような4つに分けて、特にその主要部の明示性の度合に着目している<sup>4</sup>。

第1のタイプは、たとえば日本語の「[昨日読んだ] 本」のように、関係節の内部に、関係節内における主要部の役割を顕在的に示すものが何もない空所型 (gap type) で、おそらく世界諸言語で最も頻繁に見られるタイプである。

第2のタイプは関係代名詞型 (relative-pronoun type) で、下にあげたロシア語の例のように、主要部を関係代名詞に変えて関係節の初頭に移動させるタイプである。

(1) ženščina, [katoruju ja ljublju]

女性 関係代名詞-対格 私が 愛した

〈私が愛した女性〉

関係代名詞といえば、伝統的な見方に従って、おそらく本論文集の読者に

とってなじみ深い英語の例をあげるのが適当と思われるかもしれない。英語には、確かにthe man [whose son is a doctor] のように関係代名詞型とみなして問題ないと思われる例も存在する。しかし、類型論的に見ると、英語には関係代名詞型の典型例としてあげがたい側面もある。たとえば、the man [that I met yesterday] におけるthatは、伝統的に関係代名詞として扱われているが、これを関係代名詞として扱うには、いくつか問題がある。まず、もしこれが代名詞であれば、主要部がthe menのように複数になれば、当然thoseのように複数になるはずであるが、thatのままである。また、英語で3人称の人間名詞句はheやshe等で受けるのが普通で、thatで受けることはまれであるが、この例にも見られるように、関係節においては、人間もごく普通にthatで受けている。このようなことから、少なくとも現在の類型論では、このような英語のthatは、主要部を受ける関係代名詞 (relative pronoun) ではなく、そこから関係節が始まることを表す、せいぜい関係節標識 (relative marker) とでも呼び得るものにすぎないと考え、thatを使った関係節は、関係代名詞型ではなく、空所型とみなす方が一般的である。おそらく類型論以外の言語研究分野でも、最近では、この種のthatを、たとえばI think that he is a genius などにおいて従属節を導くthatと同様に従属接続詞の一種とみなし、関係代名詞として扱わない方が一般的であろう。さらに、現代英語の場合、関係代名詞と言われているwhoについても、whichと同様、直接目的語か主語かに関わらずに同一の形式が用いられることが多くなっていることも、関係代名詞型の典型例としてあげてを躊躇させる要因である。それに対し、上にあげたロシア語の関係節は、katorujuが、主要部ženščinaと性および数（ここでは女性単数）において一致し、関係節内における文法関係を格形式として反映している（たとえば女性単数の主格形katorujaではなく、その対格形）ので、典型的な関係代名詞型の例となり得るものである。

第3のタイプは、関係節の中に主要部が代名詞の形で残る代名詞残留型 (pronoun-retention type) である。たとえば下の聖書ヘブル語の例において、主要部は、角括弧内の関係節内部に代名詞 *lô* 〈彼に〉として現れている。

- (2) *hāʔis̄ [ʔäšer nātáttí lô ʔet-hāʔarôn]*  
 男 関係節標識 (私が-)与えた 彼に その箱を  
 〈私がその箱を与えた男〉

第4のタイプは、非縮約型 (non-reduction type) と呼ぶことのできるもので、これは、たとえば下にあげたバンバラ語の例 (Comrie 1989:145) のように、関係節化された主要部 *so* 〈家〉が、関係節内にそのまま完全形で現れるものである。

- (3) *Tyè be [n ye so min ye] dyo.*  
 男 現在 私 過去 家 関係節標識 見る 建てて  
 〈男は私が見た家を建てている〉

これらの4つのタイプは、第1のタイプから第4のタイプに向かうに従い、関係節内における主要部の記号化に関して、より非明示的なタイプからより明示的なタイプになっている。すなわち、関係節内における主要部が、第1のタイプではまったく表現されず、第2と第3のタイプでは代名詞の形に縮約され、第4のタイプでは完全な形で表現されていることから、第1と第4のタイプをそれぞれ最も非明示的なタイプと最も明示的なタイプとして、第2と第3のタイプが中間的と言える。さらに、第3のタイプでは、通常の文で使われる形の代名詞が通常の語順をとって表現され

ているのに対し、第2のタイプでは、関係代名詞という、通常の代名詞と異なる特別な形式が節初頭に置かれていることから、第2のタイプの方が第3のタイプよりも、より非明示的タイプと考えられる。

#### 4. 関係節形成のタイプと接近可能性の階層

以上のように、関係節形成のタイプには種々のものがあるが、先に触れたように、多くの言語がこれらの形成法を複数合わせ持っている。たとえば、先にあげた聖書ヘブル語の例 (2) と下の2例を比較されたい。

(4) hakkōhēn [ʔāšer kātāb ʔet-haddābār]

男 関係節標識 (彼が-)書いた その言葉を  
 <その言葉を書いた男>

(5) hammalʔāk [ʔāšer sālah hammélek (ʔōtō)]

伝達者 関係節標識 (彼が-)送った 王が (彼を)  
 <王が送った伝達者>

例 (4) は、主語に対する関係節化の例で、動詞形は主要部と一致して3人称単数形になっているが、この関係節内に主語を表す代名詞 *hūʔ* <彼が>を入れれば非文法的となる。例 (5) は、直接目的語に対する関係節化の例で、この関係節内に直接目的語を表す代名詞 *ʔōtō* <彼を> は、入れても入れなくても、聖書ヘブル語として文法的に成立する。これらに対し、先に例示した (2) は、非直接目的語に対する関係節化の例であったが、この例の代名詞 *lō* <彼に> を省くことはできない。一般に、聖書ヘブル語の関係節では、接近可能性の階層の最上位から見ると、主語では空所型のみが用

いられ、直接目的語では空所型と代名詞残留型のいずれも可能で、非直接目的語以下では代名詞残留型のみが用いられる。これは、例にあげた聖書ヘブル語だけに限られた現象ではなく、たとえばペルシア語などでも同様である。

実際、世界の非常に多くの言語が、このように複数のタイプの関係節形成法を合わせ持っており、それによってより広い範囲の関係節化を可能にしている。しかも、それらの複数の形成法は、通言語的にけっして恣意的に分布しているのではなく、ある一定の普遍性に従って分布していることが知られている。これを、前述した Comrie (1989) による4つのタイプに関する主要部の明示性の度合に従って、より明示的なタイプを+、より非明示的なタイプを\*として、一部の言語例とともにあげれば表1のようになる。

これらの分布から、それぞれの関係節形成法は、接近可能性の階層において上位ではより非明示的なタイプが使われ、下位に行くに従ってより明示的なタイプが利用されていることがわかる。つまり、機能的な観点から見れば、一般に通言語的に関係節化が困難な位置ほど、より明示的な方式を利用することによって情報の復元ないしは意味的处理を容易にしている。

以上のように、世界の多くの言語は、複数の関係節形成法を共有し、それらを、このような一定の普遍法則に沿って使い分けることで、結局すべ

表1

	主 語	直接目的語	非直接目的語	所有者
トルコ語	*	*	*	+
ウェールズ語	*	*	+	+
聖書ヘブル語	*	*・+	+	+
アオバ語	*	+	+	+



ての位置に対する関係節化を可能にしている。しばしば英語がすべての位置の関係節化可能な言語の例とされるのも、実際には複数のタイプを使い分けているためにすぎない。

## 5. 関係節形成のタイプ分けの問題点

上で見たように、Comrie (1989)による4つのタイプを基に、それらを明示性の度合に応じた順序づけを行い、接近可能性の階層上における複数のタイプによる関係節形成の分布を考察すれば、確かに、多くの言語について類型論的に有意義な一般化をとらえることができる。ただし、関係節形成のタイプをこの4つに分けて分布を見ることが、はたしてあらゆる言語にとって有意義なものになり得るかどうかにについては、たとえば身近な英語や日本語の例を考えても、疑問が残ると思われる。

たとえば、英語の場合は、前述したような関係代名詞型としての取り扱いの問題もあり、やや事情が複雑になる。英語に関して、wh語を使ったものを一応すべて関係代名詞型とみなし、thatによる関係節およびthatや関係代名詞を省いた関係節を空所型とみなした場合、非明示的なタイプの空所型は接近可能性の階層における上位3つの位置で現れるのに対し、より明示的なタイプである関係代名詞型は階層上の4つすべての位置で可能ということになる。これは、より非明示的なタイプとより明示的なタイプの現れ方が逆転しているわけではなく、接近可能性の階層に対する例外とはならない。しかしながら、階層の大部分の位置で2つのタイプが重なってしまうため、類型論的にあまり有意義な分布が現れているとは言いがたいだろう。

英語の場合には、実は、thatを関係代名詞として扱えるかどうかという疑問があるだけでなく、現在でも多くの言語学者によって関係代名詞と

みなされている wh 語の扱いについても、疑問があると考えられる。すなわち、主語と直接目的語の関係節化において、wh 語は、who と whom の区別が実質的に失われてきているだけでなく、そもそも which に形式上の区別が存在しないので、主語と直接目的語に対して wh 語を使った関係節も、少なくとも前述のロシア語のような典型的な関係代名詞型の関係節ではなく、that を使った関係節と同様に空所型とみなすべきであるという主張も可能であろう。このように、英語については、関係代名詞ないし関係代名詞型の認定の妥当性という問題が残されてしまう。

むしろ、英語の場合には、たとえば the key [with which he opened the door]、the key [he opened the door with]、the book [whose cover is red] のように、非直接目的語と所有者の場合は、2番目の例（これは関係代名詞型か空所型かという分類では非明示的な空所型ということになってしまう）のように前置詞だけで表示している場合も含め、必ず関係節内における主要部の関係を明示していることから、関係を明示するタイプと明示しないタイプに分けて考える方が妥当と思われる。すなわち、英語の場合は、主語と直接目的語に対しては関係非明示型、非直接目的語と所有者に対しては関係明示型ということになり、より非明示的なタイプが上位で現れ、下位ほどより明示的なタイプが現れやすいという様子が、より鮮明になる<sup>5</sup>。このように、英語の場合は、関係代名詞型か空所型かというとらえ方よりは、むしろ関係節内での主要部の関係を明示するか否かでとらえる方が有意義であろう。

実際、Comrie (1989) は、注4でも触れたように Maxwell の提案を受けて4つのタイプに分けて考えているが、Keenan & Comrie (1977) は、[+case] と [-case] という形ですべての言語について関係節化可能な位置の分布をとらえようとしていた。ここで、もし case を単語の形態的な形式という狭義の格に限らず、前置詞等も含めて広義に関係を明示するものと

とらえれば、英語のような言語の場合には、むしろ、[+case] か [-case] かという分け方を残しておいた方が、むしろ有効であったと思われる。

関係節内での主要部の関係を明示するか否かによって関係節のタイプを分けた方が有意義な言語というのは、実は日本語についてもあてはまるだろう。日本語は、通常、主語と直接目的語は空所型を使うが、たとえば、上にあげた英語の例に対応させれば「[彼がドアを開けた] 鍵」、「[表紙が赤い] 本」のように、非直接目的語や所有者でも空所型で表現できる場合が少なくないことから、日本語は、基本的にはかなりの程度、空所型で関係節化が可能な言語と言えるだろう。しかし、これらの例が可能なのは、ドアを開けるのに通常鍵を用いる、本には通常表紙があるといった意味で、主要部の関係節内での関係が明瞭なことも1つの要因となっているのかもしれない。実際、たとえば「[彼が仕事をした] 女性」、「[彼がおもちゃを壊した] 男の子」などのように関係がやや不明瞭になってくると、多くの日本語話者にとって、「[彼と一緒に(ともに)仕事をした] 女性」、「[太郎がその子のおもちゃを壊した] 男の子」のように、関係を示すものを入れた方が自然に感じられるだろう。ここで注目すべきは、日本語において関係を示すために使われるのは、これらの例（「一緒に」、「ともに」、「その子の」）のように、必ずしも代名詞に限らない点である。したがって、日本語の場合も、先の4つのタイプに従って空所型か代名詞残留型かという形でとらえるよりは、やはり関係明示型か関係非明示型かでとらえる方が適切であろう。

上で論じたように、近年の類型論でしばしば行われている Comrie (1989) の4つのタイプによる分類が、必ずしもすべての言語において有意義な形で分布を明らかにできるとは限らない。むしろ、言語によっては、関係明示型と関係非明示型というタイプ分けによる分布を用いる、あるいは少なくとも併用する方が有意義な場合もあり得る。

## 6. 接近可能性の階層に対する例外とオーストロネシア諸語における関係節形成の発達過程

これまで見てきたところ、まず1つのタイプで関係節化するタイプでは、接近可能性の階層において上位の方から連続的に関係節化が可能になっていた。また、関係節のタイプ分けをどのようにするにせよ、複数の関係節化のタイプを持つ言語の場合、階層において上位からより非明示的なタイプによる関係節が現れ、(たとえば聖書ヘブル語のように中間で重なりを見せる場合もあるにせよ) 途中からより明示的なタイプの関係節が引き継ぐ形で現れていた。つまり、接近可能性の階層における関係節化の可能性は、途中で空き間が生じることなく、常に連続して現れていた。つまり、これまで見てきた範囲では、接近可能性の階層にとって直接的な例外となる言語例は現れていない。

しかし、接近可能性の階層には本当に例外が存在しないかという点、この階層にとって例外となる事例として、Comrie (1989) は、2つの事例に触れている。1つはいわゆる能格型によるもので、もう1つは西インドネシア諸語の中に見られるものである。

能格型では、自動詞主語と他動詞目的語が同様に扱われ、他動詞主語が異なった扱いを受ける。たとえば、日本語では自動詞主語と他動詞主語が「私が」、他動詞目的語が「私を」となるのに対して、チュクチ語では自動詞主語と他動詞目的語が *yem* で、他動詞主語が *yem-nan* となる。そこで、能格型では、同じ主語といっても他動詞と自動詞で扱いが異なってくるので、他動詞主語は関係節化不可能であるが、自動詞主語は他動詞目的語とともに関係節化可能であるという状況も、少なくとも理論的には起こり得る。実際、Comrie (1989) は、その種の例外になり得る事例としてトンガ語に触れ、能格型について特別な扱いが必要である可能性に言及してい

る。しかし、この種の能格性による例外は、接近可能性の階層の有効性にとって、それほど重大な例外とはならないと考えられる。

能格型は、上のチュクチ語の例に見られるように代名詞や名詞の格標識、すなわち形態法において現れる事例は、ヨーロッパとアフリカ大陸（ちなみに、いずれも SVO 語順が比較的優勢な地域）を除き、確かにけっして珍しい現象ではない。また、そのような形態法における能格型だけでなく、関係節形成等の統語法における能格型も、特に Dixon (1972, 1979, 1980) による研究によって存在が知られるようになり、類型論的に注目を浴びた。しかしながら、それ以降、統語法における能格型は、主としてジバル語やワルング語等のオーストラリア先住民語の一部以外ではほとんど報告されておらず、むしろ非常に珍しい現象であると考えられる。したがって、上述したような、接近可能性の階層に対する能格性に基づく例外は、生じたとしてもきわめてまれで、少なくとも普遍的傾向としての同階層の有効性にとって、大きな障害とはなり得ないと言ってよいだろう。

もう1つの例外として Comrie (1989) が言及しているのは、主語をより非明示的な方式で関係節化でき、非直接目的語ないし所有者をより明示的な方式で関係節化できるが、その間の直接目的語ないし非直接目的語の関係節化は不可能という事例である。そのような言語では、階層の中間において明らかな空き間を生じてしまうわけだが、実際、オーストロネシア語族の、特に西インドネシア諸語の中にそのような事例が少なからず観察されている。

たとえばジャワ語では、主語の位置を空所型（より非明示的な方式）で関係節化でき、所有者を代名詞残留型（より明示的な方式）で関係節化できるが、その間の直接目的語および非直接目的語は関係節化できない。つまり、ジャワ語では、下の例のように直接目的語を直に関係節化することは不可能である<sup>6</sup>。

- (6) \*rôti [séng Tômô mangan]  
菓子 関係節標識 トモ 食べた(能動)  
〈トモが食べた菓子〉

しかし、Comrie (1989) が指摘しているように、接近可能性の階層の中間に空き間ができた位置に対しては、態の変換を利用してその位置を主語に変えれば、論理的に同様の意味を表す関係節化が可能になる。たとえばジャワ語においても、(7) の例のように、受動態によって直接目的語を主語に変換すれば、主語に対する関係節化となって同様の意味を表現できる。

- (7) rôti [séng di-pangan dêné(ng) Tômô]  
菓子 関係節標識 受動-食べた によって トモ  
〈トモによって食べられた菓子〉

これは、階層の中間にギャップを生じているという意味では確かに例外であることに変わりない。しかし、表2のように（関係節化可能な位置を+、関係節化不可能な位置を-として）、より明示的な方式から、より非明示的な方式に向かう中間において文法関係の変換方式を介在させたものとしてとらえれば、やはり、この階層に流れる基本的な発想には本質的に反していないと考えることができるだろう。つまり、通言語的に最も関係節化の容易な主語は非明示的な方式でそのまま関係節化でき、直接目的語や非直接目的語は、主語のように直に関係節化することはできないが、態の変換で主語にすることで結果的に関係節化を可能にしている。そして、態の変換も利用しがたい所有者に対しては、関係を明示した方式を利用して関係節化していると考えられる。

上述のように、この種の例外は、オーストロネシア語族の主に西インド

表2

	主 語	直接目的語	非直接目的語	所有者
より非明示的方式	+	-	-	-
態の変換	-	+	+	-
より明示的方式	-	-	-	+

ネシア諸語の中に見られるものである。そこで、オーストロネシア語族における関係節形成のタイプの現れ方を観察すると、その通時的な発達過程に関して、興味深い推測が可能になってくると思われる。

オーストロネシア語族の言語は、ニューギニア島の大半とオーストラリア大陸を除き、西はマダガスカル島、東はイースター島に至る広大なオセアニア地域に広がっている。しかし、オーストロネシア語族の言語は、今からおよそ3-4千年前という、人類言語史上比較的最近において、ユーラシア大陸南東部から急速に拡大したと考えられ、基礎語彙なども均質性が高く、文法的にも比較的均質である<sup>7</sup>。実際、接近可能性の階層上における関係節形成のタイプについても、通時的な発達過程を示唆するような、ある一定の傾向が見てとれるように思われる。

オーストロネシア語族における主な関係節形成のあり方として、まず注目されるのは、マラガシ語やマオリ語のように主語だけは空所型で関係節化できるが、他は直接的な関係節化が不可能というタイプで、ここではマラガシ語型と呼ぶことにする。次に注目すべきは、アオバ語やギルバート語のように、主語は空所型で関係節化し、主語以外、すなわち直接目的語と非直接目的語と所有者は代名詞残留型で関係節化するタイプで、これをアオバ語型と呼ぶことにする。そして、もう1つのタイプは、この節で接近可能性の階層に対する例外の1つとして見たような、階層の上位を空所型で関係節化でき、下位を代名詞残留型で関係節化できるが、その中間は関係節化不可能というタイプである。この種の言語には、たとえば、上述

したジャワ語のように、主語を空所型で、所有者を代名詞残留型で関係節化するが、直接目的語と非直接目的語は関係節化できないものや、マレー語のように、主語を空所型で、所有者と一部の非直接目的語を代名詞残留型で関係節化するが、直接目的語と大半の非直接目的語は関係節化できないものなど、バリエーションが見られる。しかし、いずれにせよ、このタイプは、階層の中間において明らかなギャップを生じて、その中間に対して態の変換を利用しているもので、ジャワ語型と呼ぶことにする。

ここで、関係節形成との関連において、オーストロネシア諸語に比較的広く観察される文法現象の1つとして注目すべき点は、態の変換により主語に変えることのできる文法関係が、直接目的語に限らず、多くの非直接目的語にも及んでいることである。世界の多くの言語で、態の変換によって主語に変えることのできる文法関係は非常に限られていて、とりわけ、ロシア語やウイチョル語などのように直接目的語に限られる言語が多い。また、直接目的語のほかに非直接目的語の一部についても受動態によって主語にすることのできる言語でも、日本語やサンスクリットのように、その対象は、いわゆる間接目的語と呼ばれるような関係に限られる言語が大半である。英語では、*This bed was slept in by Lincoln* などのような、限られた特別な例は見られるものの、一般に、たとえば *He opened the door with the key* に対して、\**The key was opened the door with by him* のように言うことはできない。それに対して、オーストロネシア諸語には、直接目的語や間接目的語に限らず、非常に広い範囲の非直接目的語を受動化の対象にして、主語にすることのできる言語が多い。実際、オーストロネシア諸語では、しばしば、こうした態の変換を、多くの言語で使用されている受動態 (*passive voice*) という名称ではなく、状況態 (*circumstantial voice*) という名称で呼ぶことがある。この種の言語では、広い範囲の文法関係を態の変換で主語にできるので、多くの場合、関係節化は主



語について可能であれば十分である。そもそも、主語は、ほとんどすべての言語において関係節化が可能で、最も自然に非明示的な方法（しばしば空所型）によって関係節化されやすい文法関係であり、実際、空所型による主語の関係節形成は、オーストロネシア諸語に共通に見られる方法である。したがって、オーストロネシア諸語における元来の方式は、主語に対してのみ空所型で関係節化を行い、その他の多くの文法関係に対しては態の変換で主語にすることによって関係節化するマラガシ語型であった可能性が最も高いだろう。

マラガシ語型では、態の変換を用いることによって、主語に限らず、多くの文法関係について関係節化が可能ではあるが、所有者に対する関係節化は困難である。そのため、おそらくまず階層上の最下位の所有者から、代名詞を残すという、より明示的な方法によって関係節化を行う方式が現れ始めたものと考えられる。実際、代名詞残留型によって所有者を関係節化する言語は、すべてのオーストロネシア諸語に見られるものではなく、改新によって後に生じた可能性が高い。つまり、おそらく、ジャワ語型はマラガシ語型の次に生じたタイプであろう。

さらに、ジャワ語型のように、最初は最下位の所有者に対する関係節化の方式として生じた代名詞残留型が、次第にその言語の文法における関係節形成の方式として確立、一般化していき、主語以外の文法関係に対してもこの方式による関係節化が拡張し、主語に対する空所型による関係節化と、階層上のすべて位置を分かち合うようになったものと考えられる。つまり、主語に対しては空所型、それ以外については代名詞残留型というアオバ語型は、おそらく、オーストロネシア諸語における最も新しいタイプであろう。また、ジャワ語型の中でも、マレー語のように、所有者に限らず一部の非直接目的語に対しても代名詞残留型により関係節化する言語は、所有者について生じた代名詞残留型の関係節化が、非直接目的語の一

部にも拡張された過渡的な状態を反映しているものと見れば興味深い。

## 7. むすび

関係節形成における接近可能性の階層に基本的に流れている概念は、確かに、関係節が、通言語的にこの階層の上位のものほど形成されやすく、下位のものほど形成されにくいということである。しかし、これは、言語類型論以外でしばしばこの階層が単純化され、誤解されてきたように、この階層のある位置までは関係節化可能で、それより下の位置では関係節化不可能という普遍性が言語に存在し、英語はすべての位置について関係節化可能な言語ということではけっしてない。そのような形で一般化できる言語は、むしろ世界のごく一部の言語にすぎず、多くの言語が、複数のタイプの関係節形成法を合わせ持っており、それらのタイプを一定の普遍性に従って使い分けることで、種々の位置に対する関係節化を可能にしている。ただし、関係節形成のタイプは、空所型、関係代名詞型、代名詞残留型、非縮約型という分類が常に適切とは限らない。しかし、いずれにしても、接近可能性の階層は、関係節形成のタイプを考慮することによって初めて通言語的な言語普遍性としての意味を持ち、さらにそこから関係節形成の通時的な発達過程に対する知見を得ることも期待できるものである。

### 注

- 1 関係節形成における接近可能性の階層を含む現代の言語類型論の概要については、山本 (1992) を参照されたい。
- 2 以下、関係節の部分に角括弧で括弧をつけて表記することにする。なお、本稿の言語例について特に出典の断りがないものは、筆者の作例である。
- 3 この研究は、最初 1972 年の LSA (Linguistic Society of America) の Winter Meeting で発表された後、論文としては Keenan & Comrie (1977)、それら

の具体的なデータと解説としては Keenan & Comrie (1979a) において公開された。なお、各言語の関係節化の可能性に対する判断については、原則として、これらの資料と Comrie (1989) による判断に従う。

- 4 ここで扱う Comrie による関係節形成のタイプは、元来、Maxwell からの提案を受けたもので、Maxwell による元の提案とそれに対する Keenan & Comrie による反応は、それぞれ Maxwell (1979)、Keenan & Comrie (1979b) として、(号は異なるが) 同一雑誌においてとり上げられている。
- 5 直接目的語に対して常に who でなく whom を用いて区別する話者（現代英語話者では比較的まれと思われる）の場合は、関係明示型を主語と直接目的語の位置でも使っていることになるが、それでも、関係代名詞型と空所型に分けた場合に比べれば重なりが少なくなっている。
- 6 (6) と (7) の例は、Keenan & Comrie (1979a:340) による。
- 7 オーストロネシア諸語を含むオセアニア地域の諸言語の地理的、歴史的な拡散のあり方や分布等について、詳細は山本 (2003:71-76, 110-15) を参照されたい。

#### 参考文献

- Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell. (松本克己・山本秀樹共訳『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房：1992年)
- Dixon, R. M. W. 1972. *The Dyirbal Language of North Queensland*. Cambridge: Cambridge UP.
- . 1979. "Ergativity." *Language* 55:59-131.
- . 1980. *The Languages of Australia*. Cambridge: Cambridge UP.
- Greenberg, Joseph H., ed. 1963. *Universals of Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. "Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 8:63-99.
- . 1979a. "Data on Noun Phrase Accessibility Hierarchy." *Language* 55:333-51.
- . 1979b. "Noun Phrase Accessibility Revisited." *Language* 55:649-64.
- Maxwell, Daniel N. 1979. "Strategy of Relativization and NP Accessibility."

*Language* 55:352-71.

- 山本秀樹. 1992年. 「現代言語学の旗手たち19:バーナード・コムリー——広範な諸言語からのアプローチ」『月刊言語』7月号:104-111頁.
- . 2003年. 『世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』広島:溪水社.